おいでん・さんそんセンター

調査団体名　：　おいでん・さんそんセンター
設立年　：　2013(平成25)年8月
団体URL　：　http://oiden-sanson.com/
活動拠点　：　豊田市足助町（足助支所2階）
取材日　：　2015年11月16日

団体代表者名　：　センター長　鈴木　辰吉
対応してくれた人の名前　：　センター長　鈴木　辰吉
調査員　：　松井賢子、沖章枝、大森正昭
レポート作成者　：　大森正昭

活動内容

「おいでんさんそんセンター」は市の出先機関だが、ここが何かをやるという機関ではない。ここは、まちといなかの皆さんをつなぐプラットホームとして、住民自身が社会課題を解決するために、民間同士のつながりのサポートを行っている。

たとえば、旭地区の東萩平では当センターの仲立ちにより、H26年に住友ゴム（まち）と東萩平町（いなか）とで、『いなかとまちのパートナー協定』を締結させ、郷土の森づくり活動を永続的なものにした。また、まちの小学生との［セカンドスクール］や、草刈り応援隊を始め、まちといなかをつなぐ幾つもの活動を行っている。

キャッチフレーズ

まちとむらをつなぐ“プラットホーム”

会のモットー（何を大切にしているか）

競争ではなく、支え合って豊かになる未来の社会、賛同出来る人は誰でもどうぞ！。

設立から現在に至るまで変化したこと

オープン当初、センターとして何をやっていくかということで、プラットホーム会議に色々な団体に集まっていただき、話し合って、「おいでんさんそんセンターの描く未来」を創造し、課題解決に向けた専門部会を設けた。

現在、「地域スモールビジネス研究会」「移住・定住専門部会」「次世代育成部会」「食と農専門部会」「森林部会」の5つの専門部会をつくり、多くの皆さんが活動するなかで、ゼロから圧倒的ネットワークと拡がりによって百人力となっている。

以前は、いなかに働く場をつくり過疎化を食い止めようと考えていた。しかし、分かったことは、いなか暮らしがしたいからいなかにくる、来てから仕事を探す、ということ。

この5年で101世帯246人が来られたが、皆さん仕事があってここに来たわけではない。

連携している団体・専門家・自治体など

名古屋大学、矢作川水系森林ボランティア協議会、豊田森林学校など多数。

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動（例：小仕事づくり、山村・森林資源活用など）

5つの各専門部会が中心となり、行政につきものの縦割り対応ではなく、多くの課題を一挙に解決すべく活動している。

例えば「森林部会」では、いなかで暮らしたいという、Iターン、Uターンの若者に、林業をボランティアでなく生業にすることを目標に、夏に農業、冬には林業が出来るよう「半農半林塾」を立ち上げるなどして支援している。

現在直面している課題

林業では、間伐しなければいけない森林が山ほどあるが、材価が安く、切り捨て間伐は補助金しか出ないため、収入は時給800円にも満たない。でも諦めずにやっている。

このままでは農地も山林も集落も消滅し、荒れ地になってしまう、なんとかこれを防ぎたい。今後10年で市内の4割の農地が、跡継ぎが居ないなどのために耕作放棄され荒れていく。農地が荒れれば、そこに暮らす理由がなくなり、農村は消えていく。この課題には力を入れ取り組んでいる。

設立から3年経ち、現在スタッフ7名で運営しているが手一杯である。今後どう運営していくのか、どう進化させていくのか、3年を節目に民営化を含めその方針を議論していく。

今後やってみたいこと

いなかの住民は、農家でありまた林家でもあるが、仕事の中で「農」と「林」が交わることがあまりない。一緒になってやれることがないかと相談を受けた。かつての農と林のつながり、で何かやれることがないか考えている。

また、エネルギー発電モデル集落（薪ボイラー、バイオマス発電、電気自動車など）を現実にやろうと言う話が出ているが、どこから手を付ければよいのか今、模索している。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

5つの専門部会には大学の先生を含めた大勢の専門家がおり、このネットワークにより何事か有っても誰かが助けてくれる。役所の比ではなく百人力だ。

冊子「里CO」の感想

「里CO」という本がいい： とよたで見つけた ミライの山里暮らし、田舎から日本のミライを変える座談会、とよたの田舎へ山里女子8人の話など、思わず手にとり、そして読みたくなるきれいなデザイン、すぐに購入させていただきました。（税込 ¥1,000）

その他、伝えたいこと

行政は、税金を集めその税金を使って社会問題を解決する。しかし、今後人口が減り経済が縮小すると、多くの社会資本を税金でまかなってはいけない時代が来る。

行政スタッフも減らされる一方で、課題は増えていく。これを解決するには住民自身が主体になってやって貰うしかない。これらを効率的に行うためには、行政が様々な組織・団体・企業などと、住民とのつながりやサポートの場を提供するという役割になっていく必要がある。「おいでん・さんそんセンター」はそのような未来の市役所を模索している。

農山村は今、高齢化、人口減少にさらされているが、これは未来を先取りしているだけで、今後30年もすると日本中が今の農山村と同じ状態になる。今、いなかかダメだと諦めると、30年後の日本を諦めるということ。へこたれてはダメ。

いなかだから住みたいという人達が居る、いなかをよりいなからしくすれば、いなかはもちこたえられる。都市の病んでいる部分を助けつつ、都市の人達にいなかの課題解決を手伝ってもらう、そのための機関としてさんそんセンターが間に入る。

写真

市役所時代よりも元気そうな
センター長の鈴木辰吉さん

冊子「里CO」 とよたの
田舎へ、山里女子
8人の話

［おいでんさんそ
んセンター］
のパンフレット

［暮らしの糸をつなごう］
手作りの立体看板